

10. 農学研究科

I	農学研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	10- 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	10- 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	10- 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	10-16
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	10-22

I 農学研究科の教育目的と特徴

【農学研究科の教育目的と特徴】

昭和 45 年に設置された大学院農学研究科は、安全な食料の確保、健康な生活の維持、各種生物の機能、多様な生物が共存できる環境の構築などについて教育と研究を通して、多くの課題を解決できるリーダーとなる人材、社会のニーズに応えられる人材を養成することを主たる教育目的としている。

【教育目標】

大学院農学研究科は、自ら課題を発見し、その課題を解決する能力を身につけることを最大の目標として掲げ、社会に即応できる高度な専門職業人の養成を目指す。

生物資源科学専攻 1 専攻の下に、主コース 5 コース（応用生物科学コース・生物環境保全学コース・資源循環生産学コース・地域社会開発学コース・生命機能科学コース）、副コース 1 コース（農業技術経営管理学コース）からなる。

①高い倫理意識と国際性豊かな教養を有し、情報収集・分析能力及び優れたコミュニケーション能力を活かして、企業や社会において指導的立場で能力を発揮できる専門職業人の養成。

②生物資源の開発と機能解析、環境保全と持続的農業生産、生命化学と食糧科学、地域社会の持続可能な開発などの分野で、先端的・応用的・実用的な能力を発揮できる高度な専門職業人の養成。

③高度な農業技術と経営管理能力を有し、中・北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、実行力のある指導的立場で活躍できる高度な専門職業人の養成。

【入学者の状況】

平成 22～27 年度の入学者数は（表 1）のとおりである。学部生の進学者数は平成 21 年度(H22.3 卒業)42 人 (42/152=27.6%)、平成 22 年度(H23.3 卒業)58 人 (58/163=35.6%)、平成 23 年度(H24.3 卒業)45 人 (45/167=26.9%)、平成 24 年度(H25.3 卒業)39 人 (39/158=24.7%)、平成 25 年度(H26.3 卒業)41 人 (41/159=25.8%)、平成 26 年度(H27.3 卒業)51 人 (51/163=31.3%)であり、変動に一定の傾向はない。学部から本学大学院への入学者は平成 22 年度 38（学部の進学者数との差：-4）人、平成 23 年度 40（-18）人、平成 24 年度 43（-2）人、平成 25 年度 34（-5）人、平成 26 年度 36（-5）人、平成 27 年度 44（-7）人であり、他大学院等への転出の影響もあるが、他大学からの入学者は平成 22 年度 6 人、平成 23 年度 2 人、平成 24 年度 7 人、平成 25 年度 3 人、平成 26 年度 1 人、平成 27 年度 5 人であった。地球科学特別コース（留学生対象）には、平成 22～24 年度に 6 人が入学している。

表 1 農学研究科の入学者数

生物資源科学専攻	募集人員	入学者数					
		22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
一般選抜	40	41	40	47	35	36	45
社会人選抜	若干人	1	0	1	0	0	0
外国人選抜	若干人	2	2	2	2	1	4
計	40	44	42	50	37	37	49

【副コース：農業版 M O T 教育の概要】

本教育プログラムは、修士課程の学生を対象とする「高度な農業技術経営管理者」を育成するもので、農業版 M O T 教育によって高度な農業技術と経営管理能力を有し、中・北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、指導的立場で活躍できる高度な専門職業人の養成を行うものである。そこで、本研究科生物資源科学専攻の副コース（農業技術経営管理学コース）において、近年の農業法人や集

落営農組織体の増加，農地法改正に伴う農業への企業参入及びWTOやFTAなどの地域的・国際的な農業・社会情勢に柔軟に対応でき，アジアの途上国を含む地域農業生産と農村の振興に向けてリーダーシップを発揮する農業のプロフェッショナルの育成を目指すものである。

【想定する関係者とその期待】

農学研究科の教育目標と特徴と対比して，農学研究科関係者と関係者の期待を，次の通り想定している（表2）。

表2 農学研究科が想定する関係者と関係者の期待

想定する関係者	関係者の期待
入学志願者	研究科の教育目的・目標の分かりやすい公表
在学生	学生の期待に応える体系的なカリキュラムの編成 学生の学習意欲に応える，分かりやすい授業の提供 学生が学習しやすい環境の整備
修了生	社会人として活躍するために必要な教養と専門知識の修得 修了後も相談にのれる研究科の体制整備
在学生の保護者（家族）	学生に対する良好な学習環境の提供，学力の定着，就職・進学
修了生の受入れ企業・ 地方自治体・国	社会生活に必要な教養と職務遂行に必要な基礎的な専門知識 自ら学び取る積極性を持つ人材の育成
地域社会	地域社会と地域産業の理解者と，地域の担い手の育成
本学の教職員	本学および農学研究科の理念・目標・目的を達成するための 教育活動を実践しやすい組織・制度の整備

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 1-1 教育実施体制

1-1-1 教員組織編成や教育体制の工夫とその効果

教員は、1専攻5コース7講座39教育研究分野のいずれかに所属し、研究指導適格審査により研究指導教員あるいは研究指導補助教員として教育と研究指導を担当している。教育研究分野の構成は、「教育課程編成・実施の方針」に基づいてなされており、教育研究に対する社会的な要請に弾力的に対応することができる（表3）。

本学では、男女共同参画を推進しており、女性教員の積極的な登用により、平成22～26年度に2人の女性教員の新規採用を行った。また既採用の女性教員1人のキャリア形成を支援し、大学院担当資格取得を促した。さらに学校教育法の改正を受けて、講師・助教などの若手教員の大学院担当資格を厳格かつ積極的に認定し、大学院教育の質的改善を進めている。業績評価に基づく審査結果は、教員の昇格・昇給などに反映させている。外国人教員1人が在職しており、日本人学生の視野の拡大・国際化において大きな役割を果たしている。留学生を対象とした英語による特別教育カリキュラムとして「地球科学特別コース（前身は、国際環境学特別コース）」を工学系研究科と共同で運営している。

表3 農学研究科の教育組織

専攻	コース	講座	教育研究分野
生物資源科学	応用生物科学	生物資源開発学	熱帯作物改良学, 動物資源開発学, 植物代謝解析学, 蔬菜花卉園芸学, 果樹園芸学, 植物遺伝育種学
		生物資源制御学	植物病制御学, 植物ウイルス病制御学, 線虫学, 昆虫学, システム生態学, 動物行動生態学
	生物環境保全学	生物環境保全学	地圏環境学, 水環境工学, 浅海干潟環境学, 環境地盤学, 海浜環境情報学, 生物環境学
	資源循環生産学	資源循環生産学	農業生産機械学, 生産システム情報学, 施設農業生産学, 作物生態生理学, 家畜医療応用学, アグロフィールド保全学, 植物遺伝資源学, 資源循環生物学
	地域社会開発学	地域社会開発学	地域ビジネス開発学, 地域資源学, 人類生態学, 島嶼社会経済学
	生命機能科学	生命化学	生化学, 機能高分子化学, 応用微生物学, ☆分子細胞生物学
食糧科学		生物資源利用学, 食品化学, 食糧安全学, 食品栄養化学, 活性天然物学	
☆総合分析実験センターの教員の担当分野			

(出典：農学研究科「履修案内」)

1-1-2 多様な教員の確保の状況とその効果

農学研究科は、自然科学と社会科学の融合を特色とする農学の教育と研究を推進するための教員組織の構築に努めてきた。

農学部教員（アグリ創成教育研究センター教員を含む）および総合分析実験センターの教員で組織されている農学研究科は、各教員の専門を活かした教育を担当している。大学院担当資格を持つ教員数の構成は、（表 4）の通りであり、専攻の入学定員と各コース在籍学生数は（表 5）の通りである。

表 4 農学研究科の大学院担当教員数

コース名	講座数	教育研究分野数	大学院担当教員数				
			教授	准教授	講師	助教	合計
応用生物科学	2	12	8 (*1)	7 (**1)	*** 1	0	16
生物環境保全学	1	6	2	5 (**1)	0	*** 1	8
資源循環生産学	1	8	6	3	*** 2	0	11
地域社会開発学	1	4	4	2 (**1)	0	0	6
生命機能科学	2	9	6	6	*** 1	*** 1	14

* 外国人教員数・** 女性教員数・*** 研究指導補助教員数を示す。

（出典：平成 27 年度大学院履修案内）

表 5 専攻の入学定員及び各コースの在籍学生数

H27.5.1 現在

専攻	入学定員	1 年次	2 年次	計
生物資源科学専攻	40	49	36	85
（女子学生数, 留学生数）	-	(21, 4)	(12, 1)	(33, 5)

（出典：佐賀大学概要）

1-1-3 入学者選抜方法の工夫とその効果

農学研究科を構成する 1 専攻 5 コースの教育目的にそったアドミッションポリシー【求める学生像】、【入学者選抜の基本方針】を策定し、（表 6）それに基づいた入学者の選抜を実施している。

表 6 農学研究科 1 専攻 5 コースのアドミッションポリシー

<p>■生物資源科学専攻</p> <p>【求める学生像】</p> <p>農学を基盤とした人類の生存に必要な食料、環境、資源・エネルギー、経済・社会・文化、生命などに関わる 5 つの教育研究コースを擁しています。本研究科は、科学技術の高度化・国際化を踏まえつつ、各コースにおける学習と研究を通じて当該専門分野における専門職業人又は研究者としての知識・技能を高め、リーダーとして社会に貢献する人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。</p> <p>① 専門分野における基礎知識を持ち、かつ明確な問題意識を持つ人</p> <p>② 研究課題に取り組む旺盛な意欲と研究を貫徹する実行力のある人</p> <p>③ 語学力ならびに高いコミュニケーション能力を有する人</p> <p>④ 本研究科での研究を通じて社会に貢献しようという意識の高い人</p> <p>⑤ 農学系大学院博士後期課程に進学して、農学関連の研究者や専門技術者を目指す人</p> <p>1 応用生物科学コース：有用な動植物の育種開発ならびに生物制御機構の解明と応用を中心としたバイオサイエンスに関する知識の修得と研究を志す人</p> <p>2 生物環境保全学コース：環境負荷の少ない生物生産環境の創出と保全ならびに地球レベルから地域までの幅広い保全と創造に関する知識の修得と研究を志す人</p>
--

- 3 資源循環生産学コース：資源循環型の生物生産システムの構築ならびに環境に配慮した農産・加工とバイオエネルギー開発に関する知識の修得と研究を志す人
- 4 地域社会開発学コース：農林水産に関する政策・流通経済・経営管理システム、農村の社会構造と集落維持システムならびに産業・地域開発に伴う環境問題と健康問題に関する知識の修得と研究を志す人
- 5 生命機能科学コース：生命現象と遺伝機能の化学的解明ならびに生物の機能性を利活用した食品の製造・貯蔵などに関する知識の修得と研究を志す人

(出典：アドミッションセンターホームページ)

【入学者選抜の基本方針】

農学研究科の教育・研究理念に基づき、教育目的・教育目標・教育方針に沿った人材を育成するために、開放性、客観性、公平性を旨とした多様な入試方法と多面的な評価方法により入学者を受け入れます。

一般入試：入学の機会を広く保障するために、大学院受験資格を有する全ての者を対象とした一般入試を行います。本入試では、大学院で学ぶために必要な基礎学力、専門分野の専門的知識及び研究遂行能力等を有しているかを、外国語と専門科目に関する筆記試験及び成績証明書によって評価します。また、各コースに対する明確な志望動機や入学後の研究意欲等を、面接試験と志望理由書によって評価します。

社会人特別入試：大学卒業後に社会における専門分野の職業経験を持つ者を対象とした社会人特別入試を行います。本入試では、大学院で学ぶために必要な基礎学力、専門分野の専門的知識及び研究遂行能力等を有しているかを、研究計画書、研究業績書を踏まえた口述試験及び成績証明書によって評価します。また、各コースに対する明確な志望動機や入学後の研究意欲等を、面接試験と志望理由書によって評価します。

外国人留学生特別入試：外国人留学生に対する入学の機会を保障するために、外国人留学生入試を行います。本入試では、大学院で学ぶために必要な基礎学力、専門分野の専門的知識及び研究遂行能力等を有しているかを、口述試験と成績証明書によって評価します。また、各コースに対する明確な志望動機や入学後の研究意欲等を、面接試験と志望理由書によって評価します。

(出典：農学研究科募集要項)

なお多様な学生の入試機会を保障するため、一般選抜（1次，2次）、社会人特別選抜および外国人留学生特別選抜を実施している。そのほか、留学生を対象とした英語で教育と研究指導を行う「地球科学特別コース」を工学系研究科と共同で設置している。

特に社会人や留学生の受け入れを促進するために、秋季入学制度の導入を検討し、秋季入学に向けたカリキュラム編成の点検を行い、通年制をセメスター制に見直すなどの改善を行い、平成22年度より実施した。これにより、平成22～27年度において入学者6人/志願者19人と一定の増員効果が見られた。

(出典：秋季入学制度による入学者の受け入れ状況)

1-1-4 教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

農学研究科の教育課程の編成や教育方法等の改善に係る重要事項は、各専攻から選出された教員で構成される大学院教育委員会で審議され、具体的な方策等が関係教員に周知されている。ファカルティ・ディベロップメント（以下、FDと略す。）の立案は農学部FD専門委員会が担当している。農学部FD専門委員会は、大学教育委員会FD専門委員会、と全学教育機構高等教育開発室が担当している大学全体のFD活動と連携しながら、FDを実施してきた（表7）。本委員会は、農学部教育委員長、農学部教育委員、大学院教育委員会委員、及び農学部FD専門委員会が推薦する教員で構成されており、学部と大学院の接続を視野に入れたFDを実施できる体制になっている。

表 7 平成 22 - 27 年度農学部・農学研究科における F D 活動一覧

年度	実施日時・内容・講演者	FD 効果
22	7/7 (水): F D 研修会 (西郡アドミッションセンター准教授)	本学の FD への取り組みについて理解を深めた
	10/20 (水): F D 研修会 (滝澤ポートフォリオ専門委員長)	本学のポートフォリオシステムについて理解を深めた
	11/10 (水): 知財セミナー (ホエブス代表取締役川上由基人)	知財について理解を深めた
	12/1 (水): 佐賀大学学士力について (大石高等教育開発センター長)	本学の学士力について理解を深めた
23	7/6 (水): ティーチングポートフォリオについて (滝澤ポートフォリオ専門委員長)	本学のティーチングポートフォリオシステムについて理解を深めた
	7/20 (水): TA 研修会 (小林恒夫教授・長裕幸教授・光富勝教授: 鹿児島大学大学院連合農学研究科連大代議員)	ティーチングアシスタント制度の活用の仕方について理解を深めた
	10/19 (水): ハラスメント~思いやりのない行動~ (佐藤武教授: 佐賀大学保健管理センター長)	ハラスメントについて理解を深めた
	11/9 (水): 最近の大学生をどう理解し, 対応するか (安田郁: 佐賀大学保健管理センター・カウンセラー)	学生への理解・対応の仕方について理解を深めた
24	8/10 (金): TA 研修会 (長裕幸教授: 鹿児島大学大学院連合農学研究科 連大代議員)	ティーチングアシスタント制度の活用の仕方について理解を深めた
	9/5 (水): 佐賀大学の EA21 活動の現状と課題 (佐賀大学 EA21 委員)	本学のエコアクション 21 への取り組みについて理解を深めた
	1/23 (水): 卒論・修論教育などストレス時の学生への対応及びストレス解消法 (山内一祥助教: 全学教育機構特任助教)	卒論・修論教育における学生への対応について理解を深めた
25	6/12 (水): 佐賀大学の EA21 活動の現状及び農学部における節電対策について (近藤文義: 農学部安全衛生委員会 EA21 担当)	本学のエコアクション 21 への取り組みと本学部での問題点について理解を深めた
	7/3 (水): T A 研修会 (稲岡司教授・野間口眞太郎教授・石丸幹二教授: 鹿児島大学大学院連合農学研究科 連大代議員)	ティーチングアシスタント制度の活用の仕方について理解を深めた
	1/22 (水): この時期, 学生をどのように支援し, 研究の進展を促すか~その取組方法について~ (山内一祥氏: 全学教育機構高等教育開発室)	学生教育と研究推進の取り組み方について理解を深めた
26	7/16 (水): T A 研修会 (野間口眞太郎教授・石丸幹二教授・鈴木章弘教授: 鹿児島大学大学院連合農学研究科連大代議員)	ティーチングアシスタント制度の活用の仕方について理解を深めた
	1/14 (水): 初等教育への e ラーニング教材導入について (久家淳子氏, 穂屋下先生: e ラーニングスタジオ)	初等教育への e ラーニングの活用について理解を深めた
	1/22 (水): FD 講演会: この時期, 学生をどのように支援し, 研究の進展を促すか~その取組方法について~ (山内一祥氏: 全学教育機構高等教育開発室)	卒業研究, 修士研究時の指導方法について, 最近の大学生の特性を踏まえた対応策について理解を深めた
27	9/9 (水): FD 講演会: 「佐賀大学における障害学生支援の現状と課題」	参加者 43 人が, 佐賀大学における障害学生支援について理解を深めた
	3/4 (水): FD 講演会: 「キャリアセンターの就職活動支援状況と学生への進路指導」	参加者 45 人が, キャリアセンターの就職活動支援状況と学生への進路指導について理解を深めた

(出典: 農学研究科資料)

1-1-5 教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

「大学院課程における教育の質保証に関する方針」及び「大学院課程における教育の質保証の推進に係るガイドライン」に基づき、教育プログラムおよび教育・研究指導プロセスの検証を行い、次のような改善と質の向上に取り組んでいる。

- ・主指導教員に加えて副指導教員を置き、複眼的に教育・研究指導を行うことにより教育・研究指導プロセスの改善を図るために、研究科規程を改正して全てのコースで複数指導教員体制を敷いた。
- ・ラーニング・ポートフォリオのシステムを大学院生にも導入し、本システムを活用して「研究指導実施指導報告書」を作成し、個別教育研究指導プロセスの充実を行っている。この報告書は、まず指導教員が学生と相談の上で学期の初めに立てた研究指導計画をシステムに入力する。学生は当該学期終了までに研究実施の経過・内容等の報告をシステムに入力し、指導教員はこの報告に基づいて当該学期の研究進捗の点検・評価を行ってシステムに入力する。さらに次の学期には先の点検・評価に基づき、新たな研究指導計画を立てシステムに入力する。このプロセスを入学年次から修了年次まで繰り返すことで、研究の指導と実施の過程を記録として可視化するとともに、教育研究指導プロセスの質の保証と向上を図るものである。
- ・大学院修了に相応しい力を養成するために、大学院新入生に対するガイダンスや、学生支援機構第1種奨学金返還免除の説明会などを活用して、第三者が見て分かる実績（学会発表、論文発表等）を積極的に積むように指導し、学修・研究へのモチベーションを高めている。
- ・成績評価は、成績評価基準に基づき、平素の学修状況、出席状況、学習報告、論文及び試験等を総合的に判断して、秀・優・良・可・不可の5段階で評価し、かつGPAを導入している。
- ・修了時の学業の成果を保証する手段の一つとして、「研究指導実施指導報告書」の内容の確認を学位授与の審査要件としている。

（水準）

教育の実施体制は、期待される水準にある。

（判断理由）

1. 研究科規程を改正して、全てのコースで主指導教員に加えて副指導教員を置き、複数指導教員体制を敷いた。
2. ラーニング・ポートフォリオのシステムを導入し、研究の指導と実施の過程を記録として可視化するとともに、個別教育研究指導プロセスの質の保証と向上を図っている。
3. 学生支援機構第1種奨学金返還免除の説明会などを活用して、実績（学会発表、論文発表等）を積極的に積むように指導し、学修・研究へのモチベーションを高めている。
4. 成績評価基準に基づき、論文および試験等を総合的に判断して、秀・優・良・可・不可の5段階で評価し、かつGPAを導入している。
5. 「研究指導実施指導報告書」の内容の確認を学位授与の審査要件としている。

観点 1-2 教育内容・方法

1-2-1 体系的な教育課程の編成状況

研究科を構成する 1 専攻 5 コースは、教育目的の応じた「学位授与の方針」および「教育課程編成・実施の方針」を教育課程において策定している（表 8）。

「教育課程編成・実施の方針」に従い、平成 22 年度の改組に伴って、広い視野を養うための 5 コース横断型の専攻共通科目（必修；農学総合講義）、コース別に基礎教育及び研究分野に関する知識と問題解決能力を涵養するための基礎教育科目（必修；応用生物科学特論、生物環境保全学特論、作物生産学特論、生命機能科学特論、農業経済学特論）、専門教育科目、特別演習（必修）及び研究科間共通科目に再編成し、カリキュラムマップを通じて学生に周知している。

修了要件は、本研究科に 2 年以上在学して 30 単位以上を修得し、かつ必要な指導を受けた上、修士論文の審査及び最終試験に合格することである。学位の種類は、修士（農学）である。修士論文の評価は、主査（1 人）と副査（2 人以上）の教員が行い、各教員が 100 点満点（修士論文の内容 50 点、発表会の内容 50 点）で採点し、その平均点が 60 点以上を合格とする。最終試験は、主査と副査の教員が行い、各教員が 100 点満点で採点し、その平均点が 60 点以上を合格とする。

表 8 「学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」

農学研究科の学位授与の方針

佐賀大学大学院農学研究科の教育目的に沿った知識・技能を修得し、以下に示した学生が身につけるべき具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。

この方針に従って教育課程を編成・実施し、佐賀大学大学院農学研究科履修細則に定められた所定の単位を修め、修士論文審査に合格した者に対して修士（農学）の学位を授与する。

1. 高い倫理意識と国際性豊かな教養を有し、情報収集・分析能力及び優れたコミュニケーション能力を活かして、企業や社会において指導的立場で能力を発揮できる力を身につけている。
2. 生物資源の開発と制御、環境保全と持続的農業生産、生命化学と食糧科学、地域社会の持続可能な開発などの分野で、先端的・応用的・実用的な能力を身につけている。
3. 中北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、実行力をもって活躍できる力を身につけている。

農学研究科の教育課程編成・実施の方針

教育目的

佐賀大学大学院農学研究科の教育目的は、科学技術が高度化・多様化・国際化する時代の中で、社会のニーズに応えられる人材、すなわち確固たる専門基礎知識に裏付けられた正しい価値観を基盤とし、冷静かつ柔軟な判断力・行動力を兼ね備えた創造性豊かな専門職業人になるべき人材を育成することである。

農学研究科唯一の専攻である生物資源科学専攻において育成する人材は、第1に、高い倫理意識と国際性豊かな教養を有し、情報収集・分析能力及び優れたコミュニケーション能力を活かして、企業や社会において能力を発揮できる専門職業人であり、第2に、生物資源の開発と制御、環境保全と持続的農業生産、生命化学と食糧科学、地域社会の持続可能な開発などの分野で、先端的・応用的・実用的な能力を発揮できる高度な専門職業人であり、第3に、高度な農業技術と経営管理能力を有し、中北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、実行力をもって活躍できる高度な専門職業人である。

教育課程の編成・実施

以上のような農学研究科の教育目的を達成するために、本農学研究科には、生物資源科学専攻の1専攻を置き、その中に5つの主コース（応用生物科学コース・生物環境保全学コース・資源循環生産学コース・生命機能科学コース・地域社会開発学コース）と1つの副コース（農業技術経営管理学コース）を設置する。

また、1単位制講義を基本とするサブ・セメスター制度を導入し、柔軟なクロス履修による専門横断的な知識の修得を可能とする教育課程を編成する。専攻共通科目として農学総合講義2単位を必修とし、基礎教育科目5科目（各1単位）から2単位を選択必修とすることにより、農学における基礎的で広い知識も修得できるように配慮する。

さらに、それぞれの主コースには教育研究分野を配置し、すべての学生はいずれかの教育研究分野に所属し、指導教員の指導のもとで特別研究（必修）を履修する体制を整える。

（出典：農学研究科資料）

1-2-2 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

多様なニーズをもつ学生を教育するため、修了要件である30単位中10単位を指導教員と相談の上、他専攻や他研究科が開講する科目を履修することができる。また、社会的な要求から夜間開講の体制を整備し、社会人の受入を可能にしている（表9）。単位互換については、鹿児島大学大学院連合農学研究科の構成大学間で行えるよう次のように整備している。

社会人を対象に夜間開講する農業版MOT教育は平成26年度より新しい取組を開始した。

①MOTカリキュラムを新規拡充し、農業技術経営管理学概論、経営者論、6次産業化戦略論、実践マーケティング論、佐賀農業論、アグリ・イノベーション論Ⅰ・Ⅱ、農業技術経営管理学特別講義、農業技術経営管理学演習を新たに開設

②実践家及びMOT卒業生を外部講師として招聘

③ICT活用の教育システム（e-learningによる学修）を導入

表 9 夜間開講する農業版MOT教育への社会人受講者の推移

区分	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年	合計
社会人	12	12	9	6	12	9	60

(出典：農業版MOTステアリング委員会資料)

1-2-3 国際通用性のある教育課程の編成実施上の工夫

国際性素養教育プログラムとして、留学生向けのアグロサイエンス特論及びアグロサイエンス特別演習を開講し、平成 22～27 年度まで延べ 9 人の留学生が受講している。また、日本人学生の語学力向上の目的で、平成 27 年度より研究科共通科目「学術英語特論」を必修科目として開講し、平成 27 年度では 41 人の大学院生が受講している（表 10）。

表 10 平成 22～27 年度学術英語及び留学生向けの開講科目の受講者数

科目名	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
学術英語特論	---	---	---	---	---	41	41
アグロサイエンス特論	0	0	2	0	0	3	5
アグロサイエンス特別演習	0	0	1	1	0	2	4

(出典：農学研究科資料)

1-2-4 養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

各授業科目の授業形態は、学則、農学研究科規程、及び履修細則に基づき、農学研究科の基本理念・特色を踏まえている。各コースは、それぞれの分野の特性に応じた構成を取り、バランスにも配慮し、体系的に授業を行っている。

履修方法は、2 年間を通して行う「特別研究」、研究科必修の「専攻共通科目」（1 科目）及び研究科選択必修の「基礎教育科目」（2 科目）に加えて、専門科目に各コースの「コース必須科目（0～2 科目）」「コース選択科目（4～7 科目）」「自由選択科目（0～2 科目）」を合わせて 30 単位以上を履修することとし、各コースとも、履修モデルを示している。各モデルとも、1 年春期 A B に 12-13 単位、秋期 A B に 10-13 単位取得できるようにバランスよく開講している（表 11）。2 年次は演習および特別研究を実施している。

表 11 農学研究科における履修モデル

(1) 応用生物コース

【応用生物科学コース】履修モデル								
	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選択必修)	選 択 科 目			特別研究 (必修)	研究科間 共通科目 (内、研究科 間基礎科目 は選択必修)	単位数
			コース必修科目	コース選択科目	自由選択科目			
2年秋期B						特別研究	学術英語特論	
2年秋期A				生物資源開発学演習Ⅱ				
2年春期B								
2年春期A								
1年秋期B					生物資源開発学演習Ⅰ 熱帯作物生理学特論			
1年秋期A				生物資源開発学演習Ⅰ 動物資源開発学特論 植物病学特論				
1年春期B	農学総合講義	生命機能科学 特論		インターンシップⅠ (集中) 生物資源開発学演習Ⅰ 先端線虫科学特論 果樹遺伝学特論				
1年春期A		応用生物科学 特論		生物資源開発学演習Ⅰ 熱帯農業資源学特論 植物分子遺伝学特論				
修了要件単位数	2	2	0	12	2	10	2	30

(2) 生物環境保全学コース

【生物環境保全学コース】履修モデル								
	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選択必修)	選 択 科 目			特別研究 (必修)	研究科間 共通科目 (内、研究科 間基礎科目 は選択必修)	単位数
			コース必修科目	コース選択科目	自由選択科目			
2年秋期B						特別研究	学術英語特論	
2年秋期A								
2年春期B								
2年春期A								
1年秋期B	農学総合講義		生物環境保全学 特別演習	先端地水学特論 土質工学特論 リモートセンシング工 学特論				
1年秋期A				土壌物理学特論 農地計画学特論 生産地盤工学特論 浅海環境工学特論				
1年春期B		作物生産学特 論		インターンシップⅠ(集中) 先端環境分析化学特論 水資源計画学特論 農地環境工学特論 先端植物栄養調節学特論				
1年春期A		生物環境保全 学特論		環境分析化学特論 利水情報工学特論 環境地盤学特論 植物環境調節学特論	生産情報処理学 特論 土壌学特論			
修了要件単位数	2	2	2	10	2	10	2	30

(3) 資源循環生産学コース

【資源循環生産学コース】履修モデル

	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選択必修)	選 択 科 目			特別研究 (必修)	研究科間 共通科目 (内、研究科 間基礎科目 は選択必修)	単位数			
			コース必修科目	コース選択科目	自由選択科目						
2年秋期B			資源循環生産学 特別演習 II			特別研究	学術英語特論	30			
2年秋期A											
2年春期B											
2年春期A											
1年秋期B			資源循環生産学 特別演習 I	家畜管理学特論 循環型農業生産学特論 作物生態学特論 応用遺伝資源学特論 農用先端機械学特論							
1年秋期A				植物環境応答学特論 家畜行動学特論 発酵代謝学特論 生産システム工学特論	蔬菜花卉園芸学 特論 動物資源開発学 特論						
1年春期B	農学総合講義	作物生産学特論		インターンシップ I (集中) 分光統計解析学特論 資源植物利用学特論 先端情報技術学特論 最新土壌微生物学特論							
1年春期A		応用生物科学 特論		施設農業生産学特論 作物生産生理学特論 土壌学特論	果樹育種学特論 植物病原学特論 植物分子遺伝学 特論						
修了要件単位数	2	2	4	8	2				10	2	

(4) 地域社会開発学コース

【地域社会開発学コース】履修モデル

	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選択必修)	選 択 科 目			特別研究 (必修)	研究科間 共通科目 (内、研究科 間基礎科目 は選択必修)	単位数			
			コース必修科目	コース選択科目	自由選択科目						
2年秋期B			地域社会開発学 特別演習 II			特別研究	学術英語特論	30			
2年秋期A											
2年春期B											
2年春期A											
1年秋期B			地域社会開発学 特別演習 I		循環型農業生産 学特論 作物生態学特論						
1年秋期A	農学総合講義	作物生産学特論		農業経営学特論 (集中)							
1年春期B		農業経済学特 論		インターンシップ II (集中) 農産物市場流通特論 農村社会学特論							
1年春期A	農業政策学特論 人類生態学特論 農村地理学特論 環境社会学特論			熱帯農業資源学 特論 施設農業生産学 特論							
修了要件単位数	2	2	4	6	4				10	2	

(5) 生命機能科学コース

【生命機能科学コース】履修モデル									
	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選択必修)	選 択 科 目			特別研究 (必修)	研究科間 共通科目 (内、研究科 間基礎科目 は選択必修)	単位数	
			コース必修科目	コース選択科目	自由選択 科 目				
2年秋期B									
2年秋期A									
2年春期B									
2年春期A									
1年秋期B			先端分析科学特 論II	生命化学 演習 食糧科学 演習 (二科目 のうち一 科目がコ ース必修科 目)	糖鎖工学特論 食糧流通貯蔵学特論	特別研究	学術英語特論		
1年秋期A					食品化学特論				
1年春期B	農学総合講義	生命機能科学 特論	先端分析科学特 論I	インターンシップI タンパク質科学特論 微生物学特論 食糧流通貯蔵学特論					
1年春期A		応用生物科学 特論							
修了要件単位数	2	2	4	4	6	0	10	2	30

(出典：農学研究科資料)

履修手続きは、ウェブによる履修登録としている。講座の内容、教育研究分野の内容および授業科目の概要は、入学時に配布される大学院履修案内に掲載するとともに、ウェブ上に掲載している。農学研究科の講義、演習、実験実習は基本的に少人数教育であり、演習科目では対話・討論型授業やフィールド型授業を実施している。

全科目のシラバスは、本学共通のシラバス作成要領に従って作成され、オンラインシラバスとしてホームページに掲載している。シラバスには、担当教員名・授業科目名・開講学期・開講曜日・時限などに加えて、授業計画・履修上の注意・成績評価の方法と基準・教科書・参考書・オフィスアワーを記している。学生は、シラバスにより、履修する授業科目の内容等を知り、履修科目を選択できる。教員は、授業の初回に、シラバスを用いて、授業内容・成績判定基準などを説明している。受講生は、シラバスと授業の内容が一致しているかという観点から授業評価を行っている。

開講科目は、入学時に配布する大学院履修案内に掲載されており、オンラインシラバスは、開講年度ごとに更新している。受講する学生は、履修モデルを参考にして受講科目を決めることができる。

1-2-5 学生の主体的な学習を促すための取組

入学生を対象に、主体的な学習を促すためのガイダンスを実施し、履修モデルを紹介し、授業科目の選択、受講方法、履修方法、修了認定基準及び学位授与について説明している。成績評価基準は、「履修の手引き」に明記するとともに、学生全員に配布している。

入学者の1割強を占める他大学からの入学者の多くは、農学研究科教員の研究内容に惹かれて入学しているため、学習上および研究遂行上の障害は少ないが、必要に応じて教員は、特別の指導（補完的な教育や研究方法の指導）を実施している。

多くの教育研究分野では、学生に研究室内に机を与えているが、複数分野では、学生専

用の演習室を確保している。附属図書館には、閲覧スペースとグループ学習室があり、学生はパソコンによる図書・文献の検索や読書などを自由に行える。さらに、学生の読書意欲を高めるために、学生による選書制度を導入している。また、学生はインターネットによる情報収集を、総合情報基盤センターでも自由に行える。

TAに応募させ、教員のもとで学生の教育指導法を学ぶとともに、教員及び学生とのコミュニケーション能力を養っている。農学研究科の主要な柱である特別研究は、指導教員と相談して研究テーマを定め、実施計画書を作成して研究を実施し、その成果を学位論文として取りまとめている。

(水準)

教育内容・方法の状況は、期待される水準にある。

(判断理由)

1. 本研究科の基本理念・特色を踏まえ、各コースにおいてそれぞれの分野の特性に応じて、バランスにも配慮された体系的授業構成が取れている。
2. 各授業科目の授業形態は、大学院学則、研究科規則及び履修細則に基づいており、少人数教育、対話・討論型授業やフィールド型授業など目的に応じた多彩な工夫が凝らされている。
3. 開講科目は、入学時に配布する大学院履修案内に掲載しているが、オンラインシラバスが、開講年度ごとに更新されている。
4. 入学時のガイダンスで、授業科目の選択、受講方法、履修方法、修了認定基準及び学位授与について説明がなされ、受講する学生が、履修モデルを参考にして受講科目を決めることができるようになっている。
5. 成績評価基準が、履修の手引きに明記され、冊子が学生全員に配布されている。
6. TAへの応募を促し、教員のもとで学生の教育指導法を学ぶとともに、教員及び学生とのコミュニケーション能力を養う体制がある。
7. 特別研究は、当該講座における研究分野に関するテーマ等を選定し、学生が指導教員と相談しながら実施計画を作成して研究を進められるように、大学院教育委員会委員や指導教員がきめ細かい履修指導をしている。
8. オンラインシラバス、附属図書館における学術雑誌の閲覧、複写など、学生の自主的な学習・研究に便宜が図られている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 2-1 学業の成果

2-1-1 履修・修了状況から判断される学習成果の状況

農学研究科で修得した知識・技能などを職業生活で活すためのキャリア形成支援は、学部1年生から大学院生に至るまで継続的に実施している。授業評価アンケート調査の結果、学習目標と授業科目の履修方法についての理解度は高く、過去6年間の全在籍者数に対する修了者の割合（修了率）は、平均94.6%と非常に高い水準にある（表12）。

表12 農学研究科における年度別修了率

専攻	22年度			23年度			24年度			25年度			26年度			27年度		
	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率
生物資源科学専攻	47	40	85%	47	45	96%	42	41	98%	51	50	98%	40	37	93%	36	36	100%

(出典：農学研究科資料)

2-1-2 資格取得状況、学外の語学等の試験の結果、学生が受けた様々な賞の状況から判断される学習成果の状況

資格取得が可能な状況が確保されており、平成22～27年度におけるに教員免許取得者は6人であった（表13）。

表13 農学研究科における資格取得状況

年度	種別	人数
22	高等学校教員免許	2
23	-	0
24	-	0
25	高等学校教員免許	1
26	高等学校教員免許	3
27	-	0

(出典：農学研究科資料)

知識習得や研究実施だけではなく、論文作成能力やプレゼンテーション能力を磨けるカリキュラムの成果として、学術論文の筆頭執筆や学術集会での表彰を受けた学生が多数いる（表14）。

表14 農学研究科学生の表彰状況

年度	コース名	表彰内容
22	(資源循環生産学)	新酵母(TCR7)の開発と筆頭著者での英語論文の発表(Horie k, et al. Biosci. Biotechnol. Biochem., 74:843-847, 2010.)
	(応用生物科学)	第54回日本応用動物昆虫学会全国大会ポスター賞
23	(生命機能科学)	第64回日本栄養・食糧学会九州支部大会優秀発表賞
	(生命機能科学)	第35回蛋白質と酵素の構造と機能に関する九州シンポジウムで最優秀ポスター賞
	(資源循環生産学)	平成24年度日本醸造協会 技術賞
24	(生命機能科学)	日本栄養・食糧学会九州大会優秀発表賞
25	(生物環境保全学)	土壤物理学会 優秀ポスター賞

	(資源循環生産学)	植物微生物研究会で優秀発表賞 18th International Congress on Nitrogen Fixation で Young Scientist Award 土壌物理学会 優秀ポスター賞
	(資源循環生産学)	日本農芸化学会トピック賞, Applied and Environment Microbiology (81:3688-3698, 2015) に共著者として論文発 表
	(応用生物科学)	平成25年度日本植物病理学会全国大会で学生優秀賞
26	(応用生物科学)	日本応用動物昆虫学会 第58回講演会 ポスター賞
27	(資源循環生産学)	日本農芸化学会会誌「化学と生物」に第1著者で論文発表
	(生物環境保全学)	土壌物理学会 優秀ポスター賞
	(生物環境保全学)	日本環境化学大会(第23回環境化学討論会)優秀学生賞(SETAC 賞)

(出典：農学研究科資料)

2-1-2 学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

授業に対する満足度を測るため、平成18年度後期より、「大学院生による授業評価」を開始し、教員による「授業点検・改善報告」を行って授業内容の充実に反映させている(表15)。

表15 授業評価報告の抜粋

年度	項目	評価内容
22	授業内容の理解	授業内容の理解については、前期はコースに関係なく、8割以上の院生が「そう思う」、「全くその通りだと思う」と回答しており、大半の学生からは授業内容についての理解が得られていると考えられる。後期は、保全コース、地域コースで、その割合は減少しており、特に保全コースでは5割にとどまっている。
	満足度	満足度については、いずれのコースにおいても、前後期をとおして役9割の学生が「そう思う」または「全くその通りだと思う」と回答しており、大多数の学生は講義に対して満足感を得ていると考えられる。ただし、母数は小さいが、地域コースの後期のみ、6割が肯定的な回答であった。
23	授業内容の理解	授業内容の理解については、8割以上の院生が「そう思う」「全くその通りだと思う」と回答しており、大半の院生からは授業内容についての理解が得られていると考えられる。
	満足度	満足度について肯定的な評価をした院生は、応用生物コース90.3%、保全コース86.9%、資源コース90.0%、地域コース68.4%、生命機能コース85.5%であった。よって大多数の院生は講義に対して満足感を得ていると考えられる。
24	授業内容の理解	授業内容の理解については、「そう思う」と回答した学生は前期57.6%・後期56.1%であり、「全くその通りだと思う」と回答した学生は前期12.0%・後期9.4%であった。このように6割以上の学生が授業内容についてある程度理解していたが、よりいっそうの向上が必要であろう。
	満足度	授業から満足が得られたかという質問に対しては、「全くそうは思わない」あるいは「そう思わない」と回答した学生は前期6.5%・後期6.2%であり、ほとんどの学生は満足か、あるいは不満足であるとは思っていないことが分かった。
25	授業内容の理解	授業内容の理解は、前学期91%、後学期87%の学生が「そう思う」「全くその通りだと思う」と回答しており、大半の学生が授業内容を理解していると考えていることが確認された。
	満足度	授業の満足度は、前学期81%、後学期89%の学生が「そう思う」「全くその通りだと思う」と回答しており、適切なレベルが維持されていることが確認された。

26	授業内容の理解	授業の内容を理解している(「全くその通りだと思う」「そう思う」と回答した学生は、前学期が、地域社会開発学は96%と高く、他は67~76%、後学期が67~83%であった。学科別にみると、生物環境保全学コースは前学期66%から後学期は83%に割合が向上した様子が確認された。これは昨年度も同様の傾向が確認されており、前後学期に開講される講義の種類による影響が大きいと考えられる。講義の内容を理解していない(「全くそうは思わない」「そうは思わない」と回答した学生を見ると、生物環境保全学コースは、前学期10.11%であったものが後学期には1.41%を示し、著しい改善が認められたが、これは前後期で開講されている講義の種類が異なることから、科目ごとの評価の違いが大きく影響していると考えられる。講義内容を理解することが出来なかったと回答された科目においては、学生への指導方法を検討する必要があると考えられる。
	満足度	前学期の結果を見ると、応用生物科学科68%、生物環境保全学コース61%、資源循環生産学コース79%、地域社会開発学コース89%、生命機能科学科64%の満足感を示した。後学期は、応用生物科学科69%、生物環境保全学コース82%、資源循環生産学コース80%、地域社会開発学コース58%、生命機能科学科73%の満足感を示した。地域社会管理学コースでは前学期と後学期の差が著しい結果となった。
27	授業内容の理解 (学習到達目標の達成)	「全くその通りだと思う」「そう思う」と回答した学生は、前学期では、応用生物科学科45%、生物環境保全学コース45%、資源循環生産学コース59%、地域社会開発学コース22%、生命機能科学科75%であった。地域社会開発学コースで22%と低い値を示したが、78%は「どちらとも言えない」という回答であり、必ずしも否定的な評価ではなかった。後学期は、応用生物科学科81%、生物環境保全学コース100%、資源循環生産学コース79%、地域社会開発学コース70%、生命機能科学科92%であった。前学期よりも後学期で到達目標の達成度が向上しており、後述する満足度の向上につながったものと推察された。
	満足度	前学期の結果を見ると、応用生物科学科58%、生物環境保全学コース45%、資源循環生産学コース76%、地域社会開発学コース66%、生命機能科学科97%の満足感を示した。後学期は、応用生物科学科85%、生物環境保全学コース100%、資源循環生産学コース96%、地域社会開発学コース80%、生命機能科学科100%の満足感を示した。全てのコースにおいて前学期よりも後学期で満足度が向上しており、充実した教育が行われたことが示された。

(出典：農学研究科資料)

(水準)

学業の成果状況は、期待される水準にある。

(判断理由)

1. 過去6年間の修了率は平均94.6%と高い。
2. 高等学校教員免許の取得、学術論文の筆頭執筆や学術会議での表彰など成果があがっている。
3. 授業評価アンケートの結果は、各コースの科目毎にきめ細かい評価と対応が行われてきたことで、大学院生による授業に対する満足度は概ね良好である。

観点 2-2 進路・就職の状況

【進路・就職状況，その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況】

農学研究科の修了予定者に対する就職率（就職希望者数に対する割合）は，平成 22 年度 96.4%，平成 23 年度 94.3%，平成 24 年度 100%，平成 25 年度 97.6%，平成 26 年度 93.8%，平成 27 年度 100%である。就職分野は，6 年間でみると，食料品・飲料・飼料製造業，進学，公務員等，サービス業・その他の順であり，特に各コースが掲げる教育目標「高度職業人の養成」や「研究者の養成」等の特徴を反映して，化学産業・食品産業・教育分野において指導的役割を果たす，専門的な能力を有する人材を多数輩出することが出来ている（表 16）。

表 16 生物資源科学専攻修了生の進

進学および就職先	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	合計
進学	10	4	1	4	2		21
農業・林業	1	1	1	4	3	6	16
公務員等	3	6	2	6	6	7	32
化学工業・石油・石炭製品製造業	2	3	2	2	2	1	12
機械器具製造業	1			1		2	4
その他の製造業		2	3	1	2	1	9
食料品・飲料・たばこ・飼料製造業	10	8	12	11	7	4	52
卸売・小売業	2	1	2	2	2	3	12
情報通信業	1	1		3	1	2	8
運輸業				1			1
複合サービス事業	2	4	2	5	1	4	18
その他の教育・学習支援業		3	2	1	4		10
学校教育				2	1		3
サービス・その他	5	4	7	2	1	3	22
その他	2	6	7	4	3	3	25
未就職	1	2		1	2		6

（出典：佐賀大学農学研究科概要）

【農業版MOT修了者の活躍】

農業版MOT教育の1つの成果として修了生による新ビジネスが着実に芽生えている。平成 22～27 年度で 58 人がMOT特別の課程を修了しているが，この間，新商品を開発し販売につなげている者が農業者で 6 人，法人設立 2 人，食品産業の異業種が 3 人，障害者支援センターを設立した教員が 1 人，新商品を開発し商品化を検討中の農業者が 1 人で，計 13 人が新ビジネスに取り組んでいる。具体的には平成 24 年度に「光樹とまとジュース」，平成 25-26 年度に「しょうが飴玉」，「乾燥野菜」，「野菜パウダー」，「塩糍，エビ糍，糍ドリンク・ストーク」，ヤーコン茶を利用した「九美人」などの新商品が生まれ，平成 26 年度には食品産業と農業者・行政が連携した「バイオマス・リンク in 佐賀」の提案と実践，平成 27 年度にはMOT受講の教師が農業と福祉を連携した「障害者支援センター」の開設に取り組み，施設長として活躍している。また，農業経営の法人化についても平成 24 年度にパートナーシップ型の農業経営を目指す「(株)アググローバル」の設立，平成 26 年度には大規模露地野菜経営を目指す「(株)Plant Farm Japan」の設立など企業的農業経営に挑戦している。MOT修了生の経営や地域での活躍が評価され，MOT 1 期生が平成 26 年に全国豆類経営改善共励会で全国トップの農林水産大臣賞を，MOT 4 期生が「地球温暖化防止活動環境大臣賞」，MOT 1・2 期生の光樹とまと部会が「佐賀農業賞」を受賞するなど，MOT教育で培った斬新な経営感覚や人脈を生かして着実な成果が生まれている。さらにMOT 2 期生が韓国農水産大学校から国外現場指導教授に任命され，海外農業青年の

育成指導で活躍している（表 18）、（別添資料 1）。

表 17 農業版MOTの修了者数

プログラム名	特別の課程の内容	修了者数					
		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
高度な農業技術経営 管理者の育成プロ グラム（農業版MOT）	農業経営と地域農業の革 新、食と農の新しいビジネ スを担う人材を育成する	12	12	8	5	12	9

（出典：農学研究科資料）

表 18 農業版MOT修了生によるビジネス展開と各種受賞

項目	MOT修了年次	内容
新商品の開発・ 商品化・販売	H24年度	「光樹トマト」ジュースの商品化
	H25年度	乾燥粉末野菜の商品化
	H26年度	「塩糍」「糍ドリンク：ストック」商品化
	H26年度	ヤーコン茶を利用した「九美人」の商品化
	H26年度	「ドライベジタブル」10種類の商品化
	H27年度	「伊萬里うまか麺」6種類の商品化
農業経営の法人 化	H24年度	「(株)アグログローバル」の設立（H25.1）
	H25年度	「(株)plant farm Japan」の設立（H25.4）
各種表彰の受賞	H26年度	全国豆類経営改善共励会：農林水産大臣賞（H25.4）
	H26年度	地球温暖化防止活動環境大臣賞 （H26.12）
	H26年度	佐賀農業賞 （H27.1）
	H27年度	農産漁村男女共同参画優良活動表彰：農林水産副大臣賞
韓国農業青年の 育成指導	H25年度 ～H26年度	韓国農水産大学国外現場指導教授に就任 （H25.10）

（出典：農学研究科資料）

【在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び進路先・就職先の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果】

関係者からの評価は、アンケート調査によって行うものであるが、本研究科では、後援会の支援により、各専攻の主任の教員が就職支援活動の一環として会社訪問を行い、就職した学生の働きぶりを聞き取り調査するとともに、求人への依頼をしている。農業および食料品関連企業からは、化学産業・食品産業・教育分野において「指導的役割を果たす」、「高い専門的な能力を有する」など高い評価を得ており、「高度職業人の養成」や「研究者の養成」を各コースの教育目標として実践しているが、その学業成果が上がっている。

(水準)

進路・就職の状況は、期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 22年度以降の就職率はいずれも93%以上である。
2. 就職分野は生物資源科学専攻の教育目標を反映している。
3. アンケートの結果、進路先・就職先から高い評価を受けており、想定する関係者からの期待に応えている。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

学生を中心とした教育への改善に向け、(表 20) に示すように、平成 22 年度より 1 専攻 5 コースへの改組とカリキュラムの変更を行い、広い視野を養うための 5 コース横断型の選考共通科目(必修; 農学総合講義)、コース別に基礎教育および研究分野に関する知識と問題解決能力を涵養する基礎教育科目(必修; 応用生物科学特論, 生物環境保全学特論, 作物生産学特論, 生命機能科学特論, 農業経済学特論)、専門教育科目および特別演習(必修)に再編成した。特に Semester 制導入により、春期 A・春期 B・秋期 A・秋期 B の各期間で 1 科目 1 単位ずつの履修が可能となり、学生は多様な科目をより自由度を持って選択出来るようになった。また「特別研究(修士論文研究)」の単位比率を増やすことで、「高度職業人の養成」「研究者の養成」という研究科の教育目標に沿った人材育成のためより多くの時間を確保したことにより、教育の質が向上していると判断した。

表 20 農学研究科の修了要件

平成 21 年度以前		平成 22 年度以降	
コア科目(必修)	4 単位	専攻共通科目(必修)	2 単位
基礎教育科目(必修)	2 単位	基礎教育科目(必修)	2 単位
専門教育科目	14 単位	専門科目(コース必須, コース選択, 自由選択を含む) 16 単位以上	
特別演習(必修)	2 単位		
特別研究(必修)	8 単位	特別研究(必修)	10 単位
修了要件	30 単位以上	修了要件	30 単位以上

(出典: 佐賀大学農学研究科「履修案内」)

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

本研究科修了者の就職率は、平成 22 年度以降 93% 以上となり、各コースが掲げる教育目標「高度職業人の養成」や「研究者の養成」等の教育実践を結果として、特に、化学産業・食品産業・教育分野において「指導的役割を果たす」、「専門的な能力を有する」人材を多数輩出することが出来ている。

農業版 M O T 修了生は、各個人の力量を向上させ、着目される新商品開発を行えるようになった。個人の力量だけでなく、地域農業を牽引する人材として育てている。その結果、全国レベルでの高い評価を得て、全国豆類経営改善共励会で全国トップの農林水産大臣賞、「地球温暖化防止活動環境大臣賞」、「佐賀農業賞」を受賞している。さらに、M O T 受講者を対象とする講師として、また韓国農水産大学校から国外現場指導教授に任命されて海外農業青年の育成指導にも活躍していることから、教育の質が向上していると判断した。